

「神様にチャンネル合わせて」
サムエル記上 3 章 1－10 節

ある夜、サムエルは神さまの声を聴くことになります。その日、サムエルは、エリに代わって、「主のともし火」の番をするために主の神殿で眠っていました。神殿の中にあるろうそくの火を夕暮れから夜明けまで消さずに守るというのも、祭司の大切な務めでした。

神さまは、眠っているサムエルに呼びかけられました。最初、サムエルはエリに呼ばれたと思い、エリのもとに行きます。ところがエリは「呼んでいないから寝なさい」と答えます。そんなやり取りが 3 度繰り返されたとき、エリは、サムエルを呼ばれたのは神さまだということに気づきました。そして今度呼ばれたら「主よ、お話しください。しもべは聞いております」(9 節)と答えなさい、とサムエルに教えます。それから再び神さまがサムエルを呼ばれたとき、サムエルは「どうぞお話しください」(10 節)と答え、神さまの語りかける言葉を聞いたのです。

この時、サムエルはまだ神さまを知りませんでした。もちろん「知らない」とは言っても、全く知らなかったわけではありません。サムエルはエリから神さまのことを学び、勉強していたはずですが、しかし、「神さまを知る」というのは、単に知識を増やすことではありません。「神さまがこの私に、このように語りかけてくださっている」、そのことを体験することです。この体験が、サムエルにはまだなかったのです。「知らなかった」というのは、そういうことです。

私たちも、聖書の話聞いて、“ふーん、そうなんだ”と思っているうちは、「まだ主を知らない」ということになるでしょう。聖書の話聞いて、あるいは聖書を自分で読んで、“神さまが私に、こう語りかけている”と聖書の御言葉が自分のこととして聞けるようになった時、神さまをリアルに感じられるようになった時、つまり、神さまとの出会いを体験した時、「主を知った」ということになるのではないのでしょうか。ちょうどヤコブが、イサクの家にいるときには神さまが共にいることに気づけなかったのに、逃げるように家から離れていったときに初めて、「ここに神さまがおられた、この私と共にいてくださった」と、そのことを知ったようにです。

ただ、サムエルのすごいところは、神さまを知る前、神さまに出会う前から「主に仕えていた」ということです。それも、「主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることも稀であった」と言われる時代、つまり、ほとんどの人々が神さまの方を向いていない、神の言葉をないがしろにして神さまから離れてしまっている時代にです。ましてや、祭司エリの息子たちまでもが不品行にまみれるような、すさんでいる有様にあってもです。「いるのかいないのかわからない、声も聞いたこともない、そんな神さまの戒めを守ることに何の意味があるのか。」もしかしたら、そんな誘惑の声を聴いたかもしれません。だけど、それでもサムエルは、エリから教えられ、聞いていただけた神さまに忠実に従っていたのです。

私たちも、聖書を読んだり、聖書の話を知ったりしていても、わからないことはたくさんあります。だけど、大事なことは、わからないながらも、それでも従おうとすること、「しもべは聞いています」と、神さまが語りかけてくださる御言葉を聞こうとし続ける姿勢ではないかと思うのです。なぜなら、神さまの方は、私たちが全く気付いていなくても、ずっと呼び続けてくださっているからです。そして、そのようにしていく中で、だんだんと神さまからその御心を教えられていくのではないのでしょうか。